



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソ連の『国家学』と政治改革：国家認識の変化と国家の自立性をめぐる試論
Author(s)	中村, 逸郎; Nakamura, Itsuro
Citation	スラヴ研究, 35, 55-78
Issue Date	1988
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5173
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113286.pdf



ソ連の『国家学』と政治改革

—— 国家認識の変化と国家の自立性をめぐる試論 ——

中 村 逸 郎

1. 問題の提起

ソ連の「国家学者たち」はこの数年、「科学的共産主義理論の創始者たち」からの脱却を試みている。ここでの「科学的共産主義」とは、共産党がソ連社会主義国家に歴史的な正統性を与え、その発展を方向づけてきた理論のことである。科学的共産主義理論の「創始者たち」とはマルクスとエンゲルス、さらにはレーニンをも指し示しているのは明らかである¹⁾が、国家学者たちは特に三人の名前を挙げていない。じつは、このようにソ連国家の体面を直接に傷つけないやり方が国家学者たちの好みなのである。

蠟山政道氏によれば、日本において「国家」という概念が学問的に形成されたのは、主として19世紀ドイツの発達した「法治国家」を中心とする国家学説の影響を受けたことによる。国家学者たちは特に明治憲法の制定にはドイツの国法学から直接至大の影響を受け、「法治国家の絶対化を前提とする精緻な概念による国家学研究をもって、その方法論的対象とした。」²⁾このように、日本においては19世紀後半に「国家」が国家学の研究対象として確立されたのにならして、ソ連でのその形成はロシア革命後およそ70年たった今日まで待たねばならない。ソ連における国家の研究は革命以前からのブルジョア的法学の伝統を断ち切り、革命以後に階級概念が根幹をなす国家と法理論 (Теория государства и права) の研究として出発した。代表的な研究者の一人であるヴァシーリエフは、「国家と法理論は国家と法の問題をマルクス主義の観点から」、つまり「国家と法の社会的任務と歴史的使命は何か、それらは何故発生したのか、それらは如何に発展し、どの階級利益に奉仕しているのか」を考察する学問であると説明している³⁾。ソ連における国家の研究がこのように科学的共産主義理論、さらには史的唯物論を基底とする国家と法理論の研究になったために、正式に自立した学問領域としての国家学 (Государствоведение) は存在しなかった。事実「国家学」という言葉は現在ソ連国内で発行されている事典、辞書に掲載されていない。藤田勇氏によれば「一般に、国家と法の一般理論の歴史については、個々の学者の学説や『学派』の理論にウエイトをおいてはならない、党と労働者階級の運動が本体である、という立場がソ連では相当に強い。これは、もとより、いろいろの意味で重要な問題であるが、この前提は、しばしば、レーニンの理論の説明と党の決定によってつづられる理論史にとどまる結果をもたらす。たとえば、レニングラード大学の『ソヴィエト法の40年』は、ソヴィエト法の40年史を、理論史をもふくめつつ、各法領域にわたって総合的に研究した注目すべき集団労作であるが、その中の国家と法の一般理論を担当した論文だけは、ソヴィエト法理論40年史の叙述になっていない。レーニン理論の整理、立

法・政策史の整理、現代の通説による社会主義国家・社会主義法の原理の叙述等によって構成されている。民法学、刑法学等の個別領域での学説史研究がある程度すすんでいるにもかかわらず、国家と法の一般理論の歴史の分析が停滞しているのは、マルクス主義理論史研究が方法的に確立されていないことと関連しているように思われる。」ソ連における国家の研究が創造的でなく一般理論の叙述に徹し、革命後独自の理論史を有するにいたらなかったという藤田氏の指摘は、後で紹介するように今日のソ連の国家学者たちも認めるところである。藤田氏が著書『ソビエト法理論史研究』を1968年に執筆するにあたって、「法の理論と不可分に結びついている国家論を直接の対象からはずし、法の一般理論の理論史に対象を限っている」のは注目すべき点である⁴⁾。

ドイツや日本のようないわば西側の後進諸国においては比較的早い時期から国家学が学問領域として存在してきたのにならして、ソ連の国家学が国家と法理論の研究となり、長い間「不遇」をかこってきたのは何故であろうか。その理由を究明し、国家学形成の軌跡を辿ってみよう。

ソ連における国家の研究が科学的共産主義理論を思想的基盤としたのは、この理論を指針としてソ連社会主義社会を指揮監督する「指導権力」としての共産党が、立法および政策適用の機能をもつ「統治権力」としての国家にたいして権限の優越性を有することを説く意見が支配的であったことに起因しているようだ。例えば科学的共産主義者たちは「社会の政治的指導は統治よりも広い概念である」と主張し、党の指導性を前面に打ち出している⁵⁾。国家にたいする党の指導性を唱える見解が制している社会では、国家は専ら党による働きかけの対象であり、それ自身が独自の研究対象として認識されることはなかった。

しかし1960年代後半になると、党の指導性についての議論にわずかな変化が見えはじめてくる。ベーリフは1967年に「社会主義統治のシステムにおける党の役割については、次のような結論をくだすことができる。指導——これは統治の高度な形態である。党の指導——これは社会主義統治の重要な形態である」と述べているにもかかわらず、『統治』概念は一般には『指導』よりも広い」と記している⁶⁾。1968年になると「指導」と「統治」という概念の区分けは曖昧であるが、党と国家のそれぞれ独自の機能を論じようとする視点が現われてくる。キレーエフの修士論文によれば、「『科学的統治』と『科学的指導』という言葉はまったく同一のこと」であり、「党と国家はともに統治しているが、しかしそれらはそれぞれのレベルで自己の特質にあった方法と手段で統治をおこなっている。」⁷⁾

1960年代後半にこのように模索を開始された党と国家の関係の見直しについての議論は、1973年のヴァルラーモフの著書で一定の輪郭が描き出されることになった。「もし社会全体を社会—経済形態として、さらに完全に自己統制できる動的なシステムとして捉え、そのシステムの中で統治のもつ様々な自然発生的または意識的な要素や静態的または動態的な要素が機能するならば、統治は指導よりも広いカテゴリーとなる。指導はつねに意識された行動の表現となり、統治とはかならずしも同一ではあり得ないのである。」⁸⁾ 科学的共産主義者たちが1960年代まで説いていたような「指導は統治よりも広い概念である」という多数意見は精彩を失い、ヴァルラーモフの議論においては全く逆に「統治は指導よりも広いカテゴリー」と措定されている。1976年になるとウクライネッツは、ヴァルラー

モフの議論をさらに厳密に展開した見解を著書『党の指導と国家の統治』で発表した。彼はこの中で、『党の指導』と『国家の統治』という概念の区別の基盤となっているのは現に存在する党とソヴィエト機関の活動の分業と協業であり、党とソヴィエト機関はそれぞれ社会の中に自己の任務、活動の形態と方法をもっている」と分析している。ウクライネッツはこのように「党の指導」と「国家の統治」の分離を踏まえた上で、「社会主義下でのマルクス主義政党は指導はするが統治の役割は担わない」と強調する。彼の論旨は「つまり党は政策決定に参加してはならず、党と統治機関の機能の混同を完全に排除し、それぞれの機関が的確で有益な活動を確立する」ことにある⁹⁾。

今日のソ連において国家が国家学の研究対象として形成されようとしているその端緒を求めるならば、国家にたいする党の指導性を説く議論が後退しはじめた1960年代後半に遡ることができる。議論の中で垣間見られる党権力と国家権力の微妙な地位の変化を背景にして、この時期にソヴィエト、特に地方ソヴィエト機関の権限の強化を唱える論文が数多く発表されるようになった。例えばシュレメートは「ソヴィエト機関の機能は地方においては多くの場合軽視され、その機能の解釈ははなはだ制限されてきた」と評し、ソヴィエトを「共産主義建設の多種多様な任務の遂行、そして国家と社会業務管理への勤労者の広範で日常的な参加のための」機関であると捉えている¹⁰⁾。そしてクラシヴィーリによれば1967年から72年にかけて権限の範囲を明確にするために、研究者たちの関心がソヴィエト機関による国家管理の法的問題に注がれ、国家の研究は「管理学」の色彩を強く帯びるようになった。ここでは主に、「経済学の範疇に属する社会生産の管理、法律学と政治学の枠組に属する管理システムとしての国家および管理手段としての法について研究」するのであった。他方でクラシヴィーリは、管理学が依然として「史的唯物論に立脚」しており、「マルクス・レーニン主義によって導かれる党が作成する政治的方針の拘束を受ける」ことを認めている¹¹⁾。1973年にソ連科学アカデミー国家と法研究所が主催して開かれたシンポジウムでは、「研究主題は国家と法を社会の上部構造の主要な構成要素として研究し分析することである」と確認されている¹²⁾。このシンポジウムの参加者ケリーモフは、「マルクス・レーニン主義的方法論をより深く身につけねばならず、これを基盤として国家-法現象をすべて認識することができる」と報告している。他方で彼はすでにこの時期に、国家の研究の発展のなかに「いくつかの否定的な側面がある」と注意を喚起し、特に「この10年間に国家と法の一般理論に関する書物が約20冊出版された。しかし不幸なことに、すべての書物はよく似ており、新刊書のどれもが既刊書の内容を踏襲している」と批評した¹³⁾。しかし、マルクス・レーニン主義理論の枠組のなかからどの程度個性的で創造的な見解を組み立てることができるかについて、ケリーモフは何も答えていない。このようにソ連における国家の研究は、共産党が自己の指導性を正統化するために拠り所とする科学的共産主義理論の重い伝統を負わされ続けることになった。

しかし国家の研究はこの重荷を背負い込みながらも、この数年来独立した学問として形成されようとしている。この「陣痛」は、国家の研究が他の学問と比較してはるかに政治的に敏感で党の政策とイデオログの統制を厳格に受けやすく、党権力からの完全なる自立性を確保することの難しさを含意している。しかし、国家学者たちは研究方針について

の党権力からの干渉には敢えて「不機嫌な沈黙」を押し通すことによって、むしろ理論構成において国家権力を科学的共産主義理論から解き放された独自の研究対象として確立しようとしている。これに加えて近年見られる新しい傾向は、チホミーロフの指摘ではこれまでの国家の研究が統治行為の法的側面を強調する管理学的思考に傾いていたのにたいして、国家を「哲学的、政治学的、管理学的側面から総合的に」分析し、「国家活動の仕組」を解明しようとしたこと¹⁴⁾である。このように国家の研究はこの数年来科学的共産主義理論と法学からの脱却に努めており、「国家へのアプローチがより多面的になってきている」と言える¹⁵⁾。

ソ連における国家の研究が科学的共産主義理論と法学から最終的に脱しようとしたのは、ゴルバチョフ政権誕生の2年前の1983年であった。この画期的な脱却の舞台となったのが、ソ連科学アカデミー国家と法研究所発行の学術雑誌『ソヴィエトの国家と法』（1983年7、8、9号）で企画された誌上「円卓会議『社会主義国家理論の諸問題の研究』」である。この内容についてはすぐ後で詳細に検討する。

この誌上円卓会議の1年後に、参加者の一人であったチホミーロフ（1986年5月にソ連科学アカデミー国家と法研究所からソ連閣僚会議付属国民経済アカデミーに転任）は、はじめて論文の正式な表題として「国家学」という言葉を採用した。彼はこの中で「この数年の国家学的な諸問題に関する学術研究には著しい前進があった」が、「しかしそれでも国家学研究の規模と水準にはまだ満足することはできない」と批評している。彼によればより一層「様々な研究方法を導入」し、「政治システムの中で基軸となる制度としての国家と社会の相互関係、市民のすべてを包含する政治的統一体としての国家」についての考察が課題として残されている¹⁶⁾。

これらの問題は誌上円卓会議の中でも議論されており、国家学形成の上で大きな転換期となったこの円卓会議についての考察へ移ろう。円卓会議は、ピスコーチン（雑誌『ソヴィエトの国家と法』の編集長）によるソ連国家に関する問題提起から始まる¹⁷⁾。ピスコーチンの指摘によれば、社会主義国家の「新しい権力システム、プロレタリア国家の制度、組織、機能、秩序について開かれた考察がおこなわれてこなかった。」そしてこの理由は、科学的共産主義理論の基本的な視座がマルクス主義でいうところの「階級的な本質に集中して」おり、科学的共産主義理論の「創始者たちは将来実現されるであろう社会主義社会の一般的、原則的な状況のみに言及し、具体的な問題の解決を社会主義の実践にまかせた」ことに、科学的共産主義者たちが気づいていないからだと述べている。ピスコーチンの発言の意図するところは、科学的共産主義理論はあまりにも階級的視点を強調するが故に現実の社会主義国家の分析においては逆に無内容であるという点にある。これに関する理論的問題は後で考察する。ピスコーチンは科学的共産主義者たちはかつて、科学的共産主義理論の原則によって説明できない現実を軽視したことがあったと言う。理論がはみだした足（現実）を断ち切る「プロクレーテスの寝台」に彼ら自身がなることによって、逆に現実の行動において誤った。この失敗の典型的な事例はピスコーチンによれば、1961年のソ連共産党綱領で示されたソ連社会の将来にたいする「楽観的展望」である。科学的共産主義者たちは、党綱領の基本的戦略によればソ連国内にはすでに「敵対的な階級対立」が存

在しておらず、社会主義国家の建設の「歴史的経験」が蓄積されさえすれば、共産主義社会へ比較的早い時期に到達することが可能であると見込んだ。

ピスコーチンは、この先走りしたソ連社会の楽観的な予測は1977年のソ連憲法によって「基本的に克服された」と記し、ソ連国家を「発達した社会主義」の段階と規定する。そしてこれは「長期の歴史的段階」であり、ソ連社会主義国家はアンドロポフが規定しているように正確に言えば「この段階の初期に位置している」¹⁸⁾と述べている。様々な任務の間に先後優先と目的—手段の関係を定め、順序よく物事を進めるのは政治にも見られる作業である。社会主義国家は科学的共産主義理論によれば共産主義社会への過渡期であり、社会主義国家の「最終的な勝利」によってのみ共産主義社会は実現されると説明されている。しかし円卓会議の参加者たちは、ソ連社会主義国家の共産主義社会への移行問題についてはほとんど全く触れていない。このことは、円卓会議の参加者の一人であるザガイノーフが1974年にソ連国家の共産主義社会への発展過程の研究に専念していたのと見事に対照的である。彼は当時、ソ連国家が「第一段階としてのプロレタリアートの独裁国家」から「第二段階としての社会主義全人民国家」へ移行するという原理には同意したうえで、この「全人民国家」と「発達した社会主義国家」という言葉が「同義語」として扱われていると指摘し、ソ連国家が共産主義社会に到達するための「時代区分の厳密化」を求めた¹⁹⁾。しかし先のピスコーチンの叙述が示すように今日社会主義国家自体が長い歴史的過程であり、共産主義社会への単なる過渡期ではないことが明らかになった。ソ連社会主義は、独立的な価値を有する一つの国家形態としてその内部に様々な非階級的な対立と矛盾を孕んでいる。つまりこの過渡期が長く継続するとすればこれ自身が一つの体制またはひとつの時代となり、共産主義社会への移行過程としてではなく独立したひとつの段階としての社会主義国家が研究の焦点として浮上してくる。言い換えるならばソ連国家にとって共産主義は単なる希望の次元にとどまっておらず、目的地への確固たる方途が社会主義国家において具体性を帯びていないことが問題になっているのである。ゴルバチョフによって1986年に改訂されたソ連共産党の新しい綱領では、社会主義段階が長期間に及ぶことを想定してソ連国家は単に「発達した社会主義」の段階にあると規定された²⁰⁾。

ピスコーチンは、ソ連社会主義国家のこのような一連の新しい歴史的解釈は「社会主義国家体制の今後の発展のために、一連の問題にたいする斬新なアプローチ」を必要としていると断言する。社会主義国家において「敵対的な階級対立」が消滅したことは、ただちに「社会主義国家体制の共産主義的社会自治への転化を容易にするわけではない。」主要な課題は、「社会主義国家体制の向上の方途にすべての努力を集中する」ことであるとピスコーチンは主張する。他方でソ連社会内の非階級的対立や矛盾を解明するためにソ連の政治学は、国家学よりもはるかに早く科学的共産主義理論から脱却することになった。ソ連における政治学研究の開始は1960年代初期に遡り、ブルラツキー（現在はソ連政治学会副会長、ゴルバチョフ書記長の有力なブレーンの一人である）は1965年に、「『政治学』概念は近年〔ソ連〕社会の中でとみに市民権を得る」までにいたっていると確言した。興味深いのは、ソ連では国家学よりも政治学の形成がはやくに行われたことである。日本においては逆の様相を呈し、かつて国家学派の研究業績に比して政治学は「系統的組織的方法

性が欠けていたためその業績は比較的散漫」で、特に1920年代は国家学にたいして政治学研究の「後進性」が目立っていた²¹⁾。ソ連の政治学はブルラツキーによれば「科学的共産主義、国家と法理論、社会学、さらには経済学の接点において発生している。」²²⁾ブルラツキーの表現は間接的ではあるが、政治学研究の対象を古典的なマルクス主義と接触しない分野へ巧みに拡散させることによって、政治学の存在価値を探り出そうとしている。現実にはソ連の政治学は国家概念よりもひろい「政治システム」概念を用いて、国家現象ではなく政治過程で生じる現象の分析に比重を傾けている。

しかし、政治学は研究対象をずらすことによってソ連社会主義国家を分析するうえでの科学的共産主義理論の有効性についてまともに議論する機会を失い、この結果として逆に科学的共産主義理論をソ連国家内にいつまでも温存させることになってしまった。そして政治学は、皮肉にも科学的共産主義理論によって解明できない社会の非階級的な事象を説明してしまうのである。このようにブルラツキーは新しい学問を提唱するにもかかわらず、古い科学的共産主義理論と共存しその補完的役割を担うことになった。

ソ連の政治学は、西欧諸国の政治学と同様に学際的な色彩をますます濃くしているが、しかし国家研究には背を向けている²³⁾。これにたいして国家学者たちは、科学的共産主義理論を理論的支柱とする国家研究に従事してきた。しかし彼らは研究対象をずらすことによって政治学を誕生させた政治学者とちがって、科学的共産主義理論に執拗に内在してきたが故に、階級的視点から国家を考察する科学的共産主義理論は社会主義国家を構成する非階級的な諸要素間の矛盾と対立を解決するためのもはや嚮導理論とはなり得ないことを十分に納得し、科学的共産主義理論の有効性について問わざるを得なくなった。もちろん厳密に腑分けすることはできないが、一般的に政治学者は改革派、国家学者は保守派と評された。しかし、国家学者たちは保守派であったが故に彼らの覚醒はソ連国家、さらには共産党をこれまで規定してきた基本概念の根本的な変化の表明であり、しかも彼らの挑戦は根本的であるが故に科学的共産主義理論と共存し得る政治学者たちよりも急進的である。したがって、敢えてここで政治学ではなく国家学の動向に注目することが重要であると考えられる。

本稿は科学的共産主義理論を克服し国家学形成の最初の布石となった円卓会議において、国家学者たちが提出する諸問題を析出し、それらが如何にしてソ連国家の改革の突破口を切り開くのかを見極め、またそれに照らしてゴルバチョフ改革の将来をも展望しようという試みである。

2. 国家学と科学的共産主義理論

まず円卓会議での発言者が、社会主義国家そのものにたいして有益な分析を生み出せない科学的共産主義理論から脱却しようとするその理論的根拠について考察しよう。

ソ連の『科学的共産主義』（第6版、1983年発行）の中では、科学的共産主義理論は次のように解説されている。「これはプロレタリアートと社会主義革命の階級闘争、社会主義と共産主義建設の社会-政治的法則性、世界革命の過程についての科学である。社会-

政治的法則性は、階級間とその他の社会集団間の関係の領域においてはたらいっている。社会—政治的关系の領域を規定する重要な要素になっているのは、階級間の関係である。したがって、民族関係（敵対的または友好的な関係）の性格は、どの階級が当の民族の先頭にたっているかによって決定される。階級関係は、いつも政治的性格を帯びている。」²⁴⁾（強調は原文）

このなかで述べられている科学的共産主義理論を叙説すると、社会主義国家はブルジョア国家体制の革命的転覆とプロレタリアートによる、より正確に言えば彼らを指導する前衛政党による政治権力の奪取によって樹立される。つまり社会主義の歴史的な成立過程は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争として展開し、この闘争がたんに経済領域だけではなく政治領域にまで拡大する時に、一言でいえば政治権力の奪取が闘争の射程に入った時にのみ、真に政治的なものへと転化する。そしてこの政治的な階級闘争の世界的な発展こそが、ブルジョア国家体制を覆すと説かれている。

このような科学的共産主義理論にたいする飽き足らなさを特に強く訴えるのは、1973年に「マルクス・レーニン主義を深く身につけねばならない」と主張したソ連共産党中央委員会付属社会科学研究所講座主任、ソ連科学アカデミー正会員のケリーモフである。「史的唯物論、政治経済学、科学的共産主義理論、歴史学が国家の階級的な問題の研究だけに専念しているという異議を唱えることができる。言うまでもないことであるが、これらの学問にとって主眼となるのは、個々の問題についての研究ではなく国家一般の発展理論の問題についてである。ソ連の専門家による史的唯物論研究について以上の点をこれまで指摘してきたのであるが、結果は明白な失望を味うだけであった。史的唯物論は、社会発展の普遍的な法則についての科学であり、国家活動の任務と原則、国家の発展と死滅の展望を基礎づける本質的な問題点を繰り返すにとどまっている。しかしこのような基本的問題の研究は、マルクス・レーニン主義の古典の研究をとおして行われてきた。これまでの史的唯物論者は、社会主義全人民国家理論の発展のために多くのことを成し遂げられなかった。」²⁵⁾

ケリーモフは、科学的共産主義理論の研究主題が「国家の階級的な性格」の規定にあり、階級的観点だけから国家の本質を探求しようとするが故に国家形態一般が研究対象となっていると批判する。彼によれば、このような階級的視点からの国家の理解は、決して分析的ではなく「解釈的、叙史的」である。例えばソ連社会主義全人民国家の本質は、「階級対立が存在しない」ことにあるという結論を導いてしまう。このような科学的共産主義理論は、社会主義国家を構成する様々な要素間の非階級的な矛盾と対立という「個々の問題」を分析し解決するための有効な分析道具とはならない。ケリーモフの関心は科学的共産主義者と異なって、階級的観点だけでは説明し切れない具体的な問題——非階級的、したがって「非国家的」な矛盾と対立に向けられている。円卓会議の参加者マーノフも同様に、「発展の基本法則等の思想はわれわれの学問の中心にあるにもかかわらず、真に創造的、革新的な活動というよりもたんなる解釈、叙述になっている」と率直に認めている²⁶⁾。

ソ連共産党のカードルのための教育機関である党中央委員会付属研究所の講座主任教授ケリーモフの発言は、科学的共産主義理論に立脚する党の将来の在り方にも微妙な影響を

与えるであろう。加えて、ケリーモフが批判している『科学的共産主義』は軍学校を含む各種の大学、専門学校の一般教養科目の公定教科書として社会科学だけではなく、人文、自然科学部門の学生たちにも必読の文献であり、ケリーモフの発言の影響力は果てしなく大きいようである。

ところで、何がケリーモフからこのような発言を引き出す要因になったのであろうか、簡単に補足しておこう。ソ連社会は特に経済面において、1970年代後半から深刻な低迷に陥っており、現在ゴルバチョフ書記長の訴えるペレストロイカは最大の課題である。そこで近年政治指導者の資質として、イデオロギーの習得能力にかわって経済、政治、社会問題の解決のための実務能力が求められている。例えばゴルバチョフ政権下で政治的に台頭したルィシコフ、ザイコフ、ドルギフ、スリュニコワ、ソロビヨフらは党機関にはいる前に工場経営や都市経営管理に携わった実務経験者である²⁷⁾。いわゆるイデオロギー離れはソ連市民の間にもひろがっており、科学的共産主義理論を用いて彼らの志気を高めようとする旧態依然のやり方は、もはや不可能になっている。ソ連のある世論調査結果によれば、「マルクス・レーニン主義理論」に関心を示す市民はわずか9%にすぎなかった²⁸⁾。私が3年前にモスクワ国立大学の科学的共産主義理論講座に出席した際の観察によれば、学生たちが小春日和——ロシア語では「女の夏(бабье лето)」とよぶ——のなかでうたた寝したり、隣席の友人と談笑する光景を目にした。教授の声は小さく、格調高い講義とはほど遠かった。

3. 国家の実体と機能

国家学者たちは円卓会議のなかで、自分たちの基礎理論で、あった科学的共産主義理論が定める国家概念に論難を浴びせている。すでに述べたように円卓会議では社会主義国家の階級の本質の規定についてではなく、社会主義国家を構成する諸要素間の非階級的な矛盾や対立の分析が主題になっている。国家学者たちはソ連国家が内包する二つの側面として「実体」と「機能」を抽出し、ソ連国家が抱える問題を提出している。

国家学者たちは以前国家概念を説明するにあたって、マルクスの次のような『経済学批判』の序言の一部をよく引用していた。「人間は彼らの生活の社会的生産において一定の必然的な彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、この上に一つの法律のおよび政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。」²⁹⁾

国家学者たちのかつての解説によれば、マルクス以前の社会学者たちは社会を構成する諸要素を本質的なものと皮相的なもの、主要なものと第二義的なもの、決定的なものに従属的なものに区分けすることができなかった。しかし、マルクスの理論は社会関係の総体のなかから生産過程をとおして形成される生産関係を抽出し、これこそが社会の本質的要因であると提示した。そして生産関係とこれに対応する生産力が社会の経済構造、すな

わち社会構造の土台を構成し、政治的、法律的、哲学的、芸術的、文学的、宗教的見解およびこれらに照応する諸組織は、経済的土台のうえに立脚する上部構造を形成する。資本主義国家においてはブルジョアジーが生産手段と生産用具を独占的に所有しており、ブルジョアジーによるプロレタリアートの搾取が資本主義的な経済的階級関係を構成している。国家学者たちの以前のこのような通俗的な解説にたいして、先のマルクスの引用から明らかのように彼自身は生産関係を階級関係——これは上部構造に属する——によって説明していないが、この点についてはこれ以上立ち入らない。国家学者たちの理論を敷衍すると資本主義国家のブルジョアジーは経済的な支配階級であって、このことはただちにブルジョアジーが政治的統治者でもあることを意味しない。言い添えるならば資本主義国家においては経済と政治は相対的に制度として分離しており、政治的な統治者は経済的な支配者との関係においては一定の相対的な自立性を有している³⁰⁾。このため、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争は、先の『科学的共産主義』のなかにも記述されていたように経済領域から政治領域へと発展し政治権力を奪取した時に勝利することができるのである。

円卓会議での発言者ラーザレフは、新しい研究動向として何人かの研究者が「国家は経済的土台に立脚するひとつの要素である」と規定する科学的共産主義理論が社会主義国家に適用されるのにたいして異論を唱えていると述べている³¹⁾。彼によると「国家は、特に社会主義国家は生産の基本的手段の所有者であり、自国の『経済活動の中心』に位置し、下部構造と上部構造の事象の特質を自己の中で結びつけるのである。」ラーザレフの言うこの議論は、次のように詳解できる。資本主義国家での生産手段の私有化は階級分裂——ブルジョアジーとプロレタリアート——をもたらすが、社会主義革命は例えば工場、土地等の生産手段の一切の所有をブルジョアジーから奪い取り、この階級対立を止揚する。この時点で生産手段は、もはやある階級が他の階級を搾取する道具ではなく社会主義全人民国家の所有物となる。そして国民生産物は、国家によって例えば全人民の福祉向上のために公平に分配される。ここで肝要なのは、先に紹介した1973年のシンポジウムでは科学的共産主義理論にそって経済的基盤に立脚する上部構造に位置づけられていた社会主義国家が、一切の生産手段を所有することによって社会における経済活動の中心に据えられていることである。ラーザレフの言葉を用いれば社会主義国家は「下部構造と上部構造の事象の特質を自己の中で結びつける」のである。そしてこの結果として資本主義国家内で相対的に制度として分割されていた政治と経済の領域は、社会主義国家においては合体すると考えられている。例えばレーニンはかつて一般に「政治は経済の集中的表現」であると言ったのにたいして、社会主義においては政治と経済は合体することによって経済独自の合理性は消滅し、政治は社会の全体的表現となる。そして社会主義国家では資本主義国家に適用されるような上部—下部構造の理論的体系は崩壊し、政治的統治者——彼らの何人かはソ連人民を指導する共産党員である——は同時に経済、さらには社会全体にたいする支配者となるのである。しかし政治的統治者は被統治者との間に敵対的な階級対立がない故に、ブルジョアジーのような搾取階級ではないと断定されている。この問題は、後で詳しく検討することになる。

ラーザレフによって社会の経済活動の中心に設定された社会主義国家は、社会全体にむけて機能を発揮し、このような事態は国家の新しい規定を必要とする。そこで円卓会義では、国家は二つの観点から分析されている。一つは「政治的統一」の観点であり、もう一つは国家の「機能」の観点からである。この機能という言葉に対応させるために「政治的統一」を便宜上「実体」という言葉に置き換えることもある。

アルダーシキンは、国家を政治的統一の角度から把捉している³²⁾。「ソ連社会主義全人民国家はすべての階級、社会のなかの社会的階層、すべての民族と民族体を包含、代表し、人々の新しい歴史的共同体としてすべてのソ連人民の政治的統一である。国家体制の組織と機能性において、ソ連社会の階級性格はもはや第一義的な意味をもたない。ソ連国家は反対に全連邦的、全社会的意義を有して」おり、ソ連社会主義国家における「社会政策の首尾一貫した方向は社会的同質性の強化である。」今日ではこのように社会主義国家を政治的統一と捉えるアルダーシキンは、1974年には専ら法律的視点から社会主義国家を考察していた。例えば「法律的责任は法的規制の柔軟性にあり、法律違反者にたいして国家がおこなう道徳的、物質的、組織的、個人的な強制手段は柔軟でなければならない。」彼のこの指摘は興味深いだが、それはともかく当時の管理学的な研究方法の影響を強く受けていたようだ³³⁾。

アルダーシキンが今日述べる政治的統一としてのソ連社会主義全人民国家観が社会の非階級的な同質性を強調しているのにたいして、次に論及する国家の「機能」の側面からの考察は社会の非階級的な異質性を前提にしている。ここで重要なのは、社会主義国家概念が社会の同質性と異質性という二つの異なる側面に着眼して議論されていることである。チホミーロフは、ソ連社会には多種多様な社会利益が交錯しており、例えば共同体全体の利益と個人々の自己中心的な利益との間の矛盾、様々な集団間の利益の対立等を列挙している³⁴⁾。しかしチホミーロフはソ連社会主義全人民国家を、交錯する利益を調整し社会の基本的な要求を満たすために社会の基礎的な資源を収集し分配する「全人民的な政治-管理機関」と定義することによって、社会の相対する二つの側面を統合できると見なしている。つまり社会の様々な利害対立は国家のもつ調整機能によって克服され、アルダーシキンのような「人々の新しい歴史的な共同体」が創造されるのである³⁵⁾。チホミーロフとアルダーシキンがこのようにソ連社会主義国家の非階級性を了解しているのとは対照的に科学的共産主義者のアムヴロソフは、社会主義全人民国家は共産党によって指導される以上「階級の本質の喪失を意味するものではない。それは全人民の利益と労働者階級の理想を体現している」と断言する³⁶⁾。チホミーロフにおいては社会主義国家自身が様々な利害を統合できる非階級的な主体機能を有していると考えられているのにたいして、アムヴロソフの論稿では社会主義国家は共産党の指導に依存する階級的な従属機関として認識されている。両者の見解の相違は、すでに述べた国家研究の推移から理解できよう。

ところで、円卓会議の参加者マーノフは、国家の機能をチホミーロフのように主に経済的な管理機関としてのみ捉えようとしていない。先にラーザレフが指摘したように、社会主義国家の機能は経済的任務のみに帰結するのではなく、社会全体にたいして波及する。マーノフの所述によれば、社会主義国家は社会全体の「発展の不可欠な構成要素として検討さ

れねばならない。社会主義的生活の基本的な形象は、国家の統制に依存している。例えば社会主義国家と自由，社会主義国家と平等，社会主義国家と道徳，社会主義国家とヒューマニズムのような重要な問題がそうである。」かつてバードランド・ラッセルは、共産主義者はそもそも「経済的奴隷以外の奴隷は存在せず，一切の商品が全人民の所有となる時に完全な自由が発生するにちがいない」と信じ込んでいると非難し、「共産主義のもとでの人々が自由であることを意味しない」と強調した³⁷⁾。いまマーノフは自由，平等，道徳，ヒューマニズムの価値を生産関係に還元せずに国家との関係で論じようとしており，この点でラッセルの警鐘はようやくソ連において重要な視点として自覚されるようになった。

ソ連社会主義全人民国家はその機能において，社会全体にたいするいわば管制高地の立場に位置することはすでに明白となった。次に，ソ連社会の発展過程は社会主義国家の機能の拡大と密接に連動しており，社会主義の発展は国家の「階級業務」ではなく「一般業務」つまり非階級的な問題処理の任務を増大させる。チホミーロフによれば「プロレタリアートの利益が勤労者，全人民の利益を反映し，社会発展の前進的な過程に合致する限り，階級業務は一般業務と対立しない。全人民国家での一般業務の規模は不可避免的に増大し，社会過程の中でその任務を増大させる。」ここでチホミーロフが危惧している問題は，社会主義国家の一般業務の増大が引き起こす弊害である。一般業務の増大は国家機関の肥大化に連繋しており，国家機関の肥大化は一般業務の官僚主義化による効率の低下を生む。国家機関の官僚主義化，さらには職員の汚職と怠慢は社会内の様々な対立や矛盾を克服すべき国家のもつ調整機能の麻痺を招き，社会の異質性のみを際立たせる。そしてこのような深刻な事態は，社会の同質性を基盤とする「政治的統一体」としてのソ連社会主義全人民国家の「実体」と抵触することになるであろう。

現在ゴルバチョフ政権下で繰りひろげられている官僚主義廃絶のキャンペーンや役職者の汚職の摘発は，ソ連国家の「実体」を「機能」の観点，つまり一般業務の能率化から見直そうとうとする試みのようである。

4. 国家への人民の参加と排除

社会主義における国家機関の官僚主義化は，ソ連国家の読み直しで本当に根絶されるであろうか。円卓会議での問題提起者ピスコーチンは，社会主義発展の全過程において国家機能の規模が拡大するのは已むを得ないことではないかと述べ，反官僚主義キャンペーンや汚職官僚の摘発といった方策で果して官僚主義を克服できるのかと疑問を示唆している。そこで何人かの国家学者たちは，国家業務への人民の参加を得ることによって官僚主義を克服しようとする。ソ連人民は，元来確かに国家業務管理に参加する権利を有している。しかしピスコーチンがいうように社会主義のもとでの国家機能は不可避免的に増大するものであるならば，社会主義国家は逆に人民をより一層排除することになる。円卓会議の参加者たちは，ソ連国家が抱える参加と排除の逆説的な問題について真剣に思索を凝らしている。

ラーザレフの論述によれば，ソ連社会主義全人民国家について考察する時，国家が「全

人民の意志と利益を表明しているということが一般的に強調される。」この場合、「意識的または無意識的に『国家』概念から人民が削除されている。」しかし「人民は我国においては一切の国家権力の担い手であり、ソヴィエト人民代議員をとおして国家権力を行使する。」つまり「われわれがソ連人民とよぶ歴史的統一体は市民から構成されている一方で、ソ連市民の一人ひとりには明らかに国家業務管理に参加する権利を有している。」ラーザレフに続いてコレルスキーはソ連社会主義全人民国家体制のもとの「民主主義は国家とその機関を人民と実際に常時結びつけることを保障し、民主主義の発展は両者の結合を深化させる」と述べている³⁸⁾。

ところで拡大し官僚主義化する国家業務管理への人民の参加は、如何にして実現されるのだろうか。ラーザレフは、国家と人民を融合させる方策として肥大化する国家機関の分権化、彼の言葉を用いるならば「国家機関の『労働の分業』」を提起している。この分業は「まず国家機関の部門に対して、次に各部門の中の個々の小部門単位に対して」分権的機能と権限を付与することによって「ある機関の他の機関からの『自立性』、『抑制と均衡』のシステムを確立」しようというのである。ラーザレフの狙いは過度の中央集権制、上級機関による下級機関の活動の代行、さらには機関の間の責任のなすり合いの排除である。このように一つひとつの国家機関がもつ権限と責任を明確化することによって、人民の国家への参加が促進されると考えられている。ラーザレフは、労働の分業は「統一されたソ連国家権力の枠組のなか」でおこなわれると補足し、ソ連社会主義全人民国家の解体を目論んでいるわけではないと強調している。彼の提案はむしろ逆に分権化された国家機関への人民の参加を得ることによって、国家の基盤を強化しようというのである。ラーザレフは最後に、「多種多様な機関の権限の区分けとそれらの機関の相互作用の問題はより一層細かい研究を必要とする」と付記している。

人民の国家への参加はこれまで述べてきたソヴィエト機構をとおしてのみに限定されるのではなく、ソヴィエト機構に接合する社会組織を媒介としても実現される。チホミーロフは、国家機関を共産党と様々な社会組織から構成される政治システムのなかで把握している。彼はすでに述べたように社会のなかの錯綜した利害の対立に注目しており、共産党が人民の共通の見解と利益の表明者であるのにたいして、社会組織は個別的で具体的な意志を体現すると論じている。両者は、社会の全体と部分の利害を代表する相互補完の関係を構成する。チホミーロフが国家機関との接合を党組織、社会組織に拡大しているのにたいして、ザガイノーフは共産党だけに限定し、党が活動を強化すれば肥大化する国家機関の弊害をなくすことができると判断しているようだ。しかし、共産党の活動の強化は党組織の肥大化、さらには官僚主義化を生み出すことになるが、ザガイノーフはこの点についてはいまのところ何も触れていない³⁹⁾。

こうして円卓会議の参加者の多くは、肥大化するソ連社会主義全人民国家は分権化されることによって人民の国家への参加が保障されると判断している。他方で、ザガイノーフの議論では国家の分権化にかわって共産党の全体性が問題として浮き彫りにされるが、これは彼の態度にも見られるように国家学者にとっては力量を越える問題のようだ。

5. 国家の統治者と被統治者

前章では社会主義全人民国家への人民の参加の問題を考察したが、これをさらに検討してみたい。繰り返しになるが、ソ連の全人民はソヴィエト機構をとおして国家統治への参加の権利を有している。このことは公式的に認められており、「人民はソ連社会主義全人民国家の政治的基盤をなすソヴィエト人民代議員をとおして国家権力を実現」し、ソ連国家は「労働者、農民、インテリゲンツィア、国のすべての民族と民族体の意志と利益を表明する。」「全人民国家は社会主義的民主主義の発展過程では新しい高度な段階であり、社会業務の効率的な管理、国家の問題への勤労者のより一層活発な参加を保障する。」⁴⁰⁾

公式の見解ではこのように勤労者大衆は、国家管理への参加を承認されている。しかし厳密に言えば社会主義全人民国家といえども、人民の全員がそれに加わることはできない。現実の政治的統治者は、常に少数者である。かつて近代政治思想家ルソーは、社会は相対的に平等な人々の意識的な結合契約の産物にもかかわらず、「多数者が支配し、少数者が支配されるというのは、自然の秩序に反している」⁴¹⁾と述べた。敵対的な階級対立が消滅したという点で平等な人民を生み出したソ連社会主義全人民国家においても、論理上の政治的統治者は少数者、つまりソヴィエト人民代議員である。この場合論理的には、社会の構成員間の任意の同質性——ルソーにおいてはすべての権利を社会に完全に譲渡することによって生まれる平等な人々、ソ連においては搾取階級を廃絶することによって誕生した平等な人々——が、多数者にたいする少数者の統治を容認する前提条件を構成している。したがって多数者にたいする少数者の統治は、ソ連国家体制の理念と少しも抵触しない。むしろ逆に少数者による統治という契機があるからこそ、全人民国家論が唱えられるのである。全人民がたんに数としていわば無機的に点在しているだけであるならば、全人民国家を構成する多数者にはなり得ない。こうしてソ連社会主義全人民国家では全人民の国家管理への参加が保障されているにもかかわらず、現実の政治的統治者は少数者であるという逆説的關係は、統治者と被統治者間の階級的同質性を挿入することによって直接的結合關係に轉換されるのである。

円卓會議の参加者ブテンコは、ソ連社会主義全人民国家の統治者と被統治者間の同質關係よりもむしろ異質關係に注目し、如何にして兩者間の逆説的關係を直接的關係に変換できるかを検討している⁴²⁾。そ彼はこの問題を考えるにあたって、地方ソヴィエトを事例としてとり上げている。まず地方ソヴィエト機関の概要を紹介しておこう。地方ソヴィエト人民代議員は2年半おきに人民によって選挙で選ばれ、年4回開催される総会において地域内の経済、社会、文化等の住民生活に関わるすべての問題を審議する。会期間に生じる問題と総会で決議された政策を遂行するのは執行委員会であり、この構成員は選挙後の最初の総会で選出される。彼らは他の代議員とちがって常時活動しており、行政に深く精通している。このため彼らは実際には行政専門官——そして彼らの何人かは共産党員である——で、総会では他の代議員よりも大きな発言力を有している⁴³⁾。ブテンコは、この地方ソヴィエト機関がもつ原則的な二つの権力機能を提起している。一つは、人民代議員は全人民による選挙で選ばれ彼らの構成する総会が全人民の意志にもとづいて行使する「政策

決定機能」であり、もう一つは人民の代表者たち（執行委員）による日常的な「統治機能」である。

もし科学的共産主義者がいうように統治者と被統治者間の階級的同質性のみに注視するならば、多数者によって選出された人民代議員たちが集まる総会は彼らの意志と利益を忠実に反映し、総会の決定は政治的統治者によって多数者のために遂行されている。しかしブテンコは統治者と被統治者間の問題を分析するにあたって、階級概念ではなく独自の三つの権力概念——「勤労者の名による権力」、「勤労者のための権力」、「勤労者自身をとおしての権力」——を導入する。彼の叙述によれば、「現存の社会主義諸国では『勤労者の名による権力』と『勤労者のための権力』は勤労者の利益のために以前から確立され順調に機能している。しかし、このことは、社会主義のもとでの政治権力の領域に何ら深刻な問題、部分的には『勤労者のための権力』が『勤労者自身をとおしての権力』へ移行する過程に問題がないことを意味しない。」ブテンコは「勤労者のための権力」と「勤労者をとおしての権力」の間に重要な一線を画し、統治者と被統治者間に同質性が崩壊している、言い換えるならば両者の間に階級的な要因とは異なった原因で生じる乖離が存在していることを認めている。

この両者の裂け目を生み出す原因となっているのは、ブテンコの指摘によれば統治者の「官僚主義的、テクノクラートの思考」である。彼は、「現代社会では社会業務の管理ははなはだしく複雑化しているために専門的な知識を必要としており、いかなる理由においても将来〔レーニンが『国家と革命』で書いているような〕『一人ひとりの料理女が統治できる』時は訪れないであろう」と確信している。ソ連社会主義全人民国家では、レーニンの予言に反して現実には人民は「交代」で社会業務の効率的な管理に参加できないまでに、政治的統治者の統治技術が高度に専門化している。官僚主義の問題は、ブテンコにとっては本稿でこれまでに論及したようなソ連国家の「実体」を「機能」の観点から読み直したり、国家機関の分権化を提唱するだけでは克服できない難題なのである。ソ連社会主義全人民国家はたんに人民から遊離するだけではなく、全人民にたいして高度な専門知識をひけらかす巨匠の如く尊大に輝く危険性を有している。

ブテンコは、統治者と被統治者間に同質性を回復するために経済的視点と政治的視点を挙げている。彼がこの二つの視点を提起する理由は、すでに述べたように資本主義国家で生じる諸問題は主に経済領域から派生するのにたいして、社会主義国家で惹起する問題は経済と政治の両域から生起するからである。社会主義全人民国家では最悪の場合、人民は「勤労者のための権力」を標榜する統治権力によって、資本主義国家で蒙る二倍の苦痛——経済と政治の二つの領域において——を覚悟せねばならない。社会主義全人民国家での統治権力はもはやブルジョアジーのような搾取階級ではないという科学的共産主義理論は、人民にとってはカンフル剤となり得ない。ブテンコのいう経済的視点は、「権力者がだれの利益（勤労者または支配者）を実現しているか」（強調はブテンコ、以下も同じ）を重視する。「ここで考慮しなければならないのは国民所得が社会のなかでいかに分配されているか、国民所得の何割が直接に勤労者の要求、彼らの生活利益の満足に寄与しているかである。」ブテンコは、政治的統治者が「経済的富を不当に取得する可能性」を示唆

している。彼の提起するもう一つの視点は、政治的視点である。彼は、「勤労者に不可欠な経済的利益の満足の大きさは勤労者自身の意志と彼らの決定によって規定される」と主張し、統治者と被統治者間の政治的意志の緊密化を訴えている。彼にとって両者が一体化した権力は、正確には「勤労者のための権力」であることにまちがいないが、実質的には「勤労者自身をとおしての権力」と同じである。「だれの意志が統治し、どの程度勤労者自身が自己の権力機能をだれにも渡さずに実現するのか、社会生活のいかなる領域においてそしてどの程度に勤労者自身が最終的な決定をくださのか」が、肝心なのである。ブテンコによれば日常的な統治機能は、人民の意志にそった人民代議員総会での決定を受けて「統治者の権限」によって行使される。しかしこの権限は、「勤労者自身のもつ権限」に決して優先させてはならない。

ブテンコの提出した論点を整理すると、「官僚制」と「官僚主義」の問題に置き換えることができる。人民全員が統治することができない以上、統治形態としての官僚制は当然に必要である。警戒すべきことは、官僚制が官僚主義のもつ悪弊——例えば繁文縟礼、形式主義、創意の欠如、民意を無視しようとする不逞な野心など——を有することである。ブテンコは、残念なことに紙幅の制限によりこの問題については詳細な論及をおこなっていない。ソ連社会主義全人民国家における統治者と被統治者の問題、そして統治者のなかに共産党員がいる以上間接的には共産党と人民の問題を独自の観点から思索しているブテンコの論稿は、刮目に値する。

円卓会議の参加者ピリヴァロフはブテンコほどに多くは語らないが、ソ連国家の統治の問題を大きくしかも辛辣に提出している。「社会主義国家は、様々な次元の対立を有している。例えば一方では国家と社会、集団、市民との間の対立、他方では権力とその実現形態（立法と行政）との間の対立、社会行政における自治の発展およびその任務と専門的な国家機関の数の増加傾向との間の対立が存在している。」これらの「対立は、総体として構造的で内容豊かな機能を擁する一定のシステムを形成している。このため対立の解決は、同時にシステム的な性格を帯びざるを得ない。」⁴⁴⁾ ソ連国家内の対立をシステムの問題として捉える見方は、大へん刺激的である。従来的一般の見解によれば社会主義国家の社会システムそれ自体は健全であり、社会システム内で生じる矛盾や対立は個別の問題、つまり技術的、行政的な手段によって解決できる現象であって、これらは社会システム全体にとっては当然に副次的な性質のものにとどまっていると公言されてきた。

ブテンコとピリヴァロフの論及は、ソ連の科学的共産主義者たちにとっては大いに挑発的なものに映ったにちがいない。科学的共産主義理論によれば、敵対的な階級対立の払拭されたソ連社会主義全人民国家での人民の意志は明白で、彼らの政治的意志と経済的利益は共産党の指導に基づいて彼らを統合する国家機構としてのソヴィエトに体现されているはずである。しかしすでに明らかになったように統治者と被統治者間には、政治的意志と経済的利益において乖離が存在している。ブテンコにとっては科学的共産主義理論は人民の意志を階級的観点からあまりにも自明なものとして過信しているために、統治者の政治的意志と経済的利益を全人民のものとして同一であると短絡視しすぎているように思えるのである。科学的共産主義者たちはブテンコとピリヴァロフの論文をとおして、ソ連社会主義全

人民国家はせいぜいその理念を表明しているにすぎず、実際には人民の政治的意志と経済的利益そのものを体現していないという形骸化した現実に直面することになるだろう。社会主義全人民国家が政治と経済の領域において人民の信頼と支持を失った場合に、いかに合理的に対処すべきかを真面目に思案したことのある科学的共産主義者は、誰ひとりとしていない。

ソ連人の亡命者ヴォスレンスキーは、西側にあつてブテンコとピリヴァロフの提出した問題を次のように叙述している。『管理者』は疑いもなく、ひとつの大きな人間集団を形成している。そしてこの集団は、社会的生産の歴史的に特定のシステムの中で置かれた場によって他とは区別され、また生産手段との関係、労働の社会的組織における役割、つまり、社会的富の中で自分達が自由にできる分け前を獲得する手段および量によって、他とは区別される。つまり全体として『管理者』集団に、階級の定義はあてはまるということである。結論を出そう。管理者はひとつの階級である。そして生産において、また社会生活の他のすべての分野において、指導権を握る階級であるために、ソヴィエト社会の支配階級なのである。⁴⁵⁾ (強調はヴォスレンスキー) 対立や矛盾を説明するのに階級概念を常套手段としてきたのは科学的共産主義者、特にスターリン主義者たちである。ヴォスレンスキーは、統治者と被統治者の問題を分析するにあたって科学的共産主義者の用いる階級概念を導入し、ソ連社会主義全人民国家の本質は統治者が「支配階級」になっていることであると結論づけている。ヴォスレンスキーはたとえ個人的に反ソ感情を抱いているにしても、皮肉なことに科学的共産主義者と同一の「思考範型」にあり、したがって彼らと同じような理論的構造を有している。すぐ後で明らかになるように、彼の「思考様式」はスターリン主義学説を凌駕するものではない。

6. 結論

ソ連の科学的共産主義者たちはロシア革命以後国家の階級の本質を見極めるそれ自身の慣習的な語彙と方法を確認し、それらは国家の研究に限らず法律学、経済学、文学さらには自然科学分野の研究をも制約してきた。ソ連ではこのような状況のもとで多くの場合研究者たちによる変革の試みは一般大衆を動員するやり方ではなく、西側のソ連専門家はもちろんのことソ連の市民にも目につかない会合や『ソヴィエトの国家と法』のような学術雑誌のなかでおこなわれる。西側諸国では一般に変革の試みについて論じあう場合発言者たちの間の意見の共通点や対立点が明確に打ち出されるのにたいして、ソ連では例えばこの円卓会議のようにむしろ発言者たち間での観点の相違が強調される。そしてこの両者の相違がもたらす結果として、西側諸国においては反対意見が議論の自由を押しひろげるのにたいして、ソ連においては観点の相違が議論の振幅——科学的共産主義理論のように階級的観点に限定するのではなく——を拡大する。

丸山真男氏は1956年に著名な論稿「『スターリン批判』における政治の論理」のなかで、スターリン主義的考察の特質は事象の本質的原因を遡って追求することにあると指摘した。丸山氏の主張は、次のとおりである。「遡及論の醗酵する泉源を掘り下げて行くと、

必ず行き当るのが、いってみれば『本質顕現』という思考様式である。平たくいえば『ついにその正体を暴露した』というあの考え方である。これは悪い面の場合だが、逆に大衆の政治意識や社会主義体制の歴史過程に適用されると、『ますますその本来の性格が——外部からの暗雲を排して——実現する』ということになる。先天的内在的なものの顕在化という論理は、発展の論理としては有機体の論理であり、規範論理としては自然法的思考であって、外（状況）からの衝撃によって内（主体）そのものが変動し、また『内』の運動と作用によって『外』自体も推移して行くというモメントがなければ弁証法的な思考とはいえない。」⁴⁶⁾（強調は丸山氏）ブテンコの提出した統治者と被統治者間の裂け目の問題について、もしソ連にいるスターリン主義者と科学的共産主義者が階級的視点から丸山氏の指摘する「本質顕現」型思考様式でもって真剣に究明するならば、亡命者ヴォスレンスキーと同じ結論——「管理者はひとつの階級である」——に直面せざるを得なくなるだろう。この本質が意味するところは管理者こそがソ連国家の諸悪の根源であり、彼らの追放なくして国家の新しい未来はないということである。ヴォスレンスキーは丸山氏の言葉をかりればついに悪の正体を剔抉し、その根本的な解決策——それが正しいかどうかは別の次元の議論である——を提起した。これは管理者にとってはむしろ肺腑をつく一言であり、両者の間には排除の論理のみがはたらく。そしてヴォスレンスキーは、皮肉にも追放すべき相手によって逆に追放されてしまったのである。ソ連に住む科学的共産主義者がヴォスレンスキーと同じ境遇にあいたくなければ、この問題に無関心を装うかまたは論理過程のどこかの地点で判断停止の作業を意図的におこなわなければならない。しかし、科学的共産主義者である限りこの問題に立場上無関心ではできず、また逆にヴォスレンスキーのような身の上になりたくないとすれば、ソ連社会主義全人民国家はすでに「階級対立が存在していない」と言明せざるを得ないのである。彼らの発言は西側諸国のソ連観察者からは自国の現状を知らない滑稽な内容と評され、しかも彼らは共産主義イデオロギーの擁護者としてソ連共産党の庇護のもとで安楽な生活をしていると見られている。しかし実際はこれとは反対に科学的共産主義者たちは緊張した研究生生活をおくっており、彼らの発言は絶えず狭隘な選択肢のなかから慎重に発せられているのである。

このように学問研究を自ら限定してしまう科学的共産主義者とは対照的に国家学者たちは本稿の冒頭で述べたように、もはや足枷となった科学的共産主義理論からの脱却を試み始めている。階級的観点から国家の本質を追究しようという科学的共産主義理論は、ソ連社会主義国家に内在しそれを構成する諸要素間の非階級的な対立や矛盾を分析するのにあまりにも非力なのである。国家学者たちはソ連国家が包含する諸問題を階級的観点から叙述するのではなく、それに内在的に立向い相対する二つの観点——実体と機能、参加と排除、統治者と被統治者——から考察している。河合秀和氏の論稿によればこのような二つの観点は、「その双方がそれぞれに経験的な検討に耐えるだけの説得力を持っているが、しかし他の一方とは明らかに異質で対照的で排他的である。」いずれか一方の観点からだけでは説明することはできず、相対するもう一つの観点を設定し「逆説的な対句」を構成することによってはじめて意味をなすのである。そして国家の「定義が逆説的な対句として表現されることは、実はそれぞれの定義において本質が二つあることを意味している。」

実体と機能，参加と排除，統治者と被統治者がそれぞれ有する逆説的な関係についてはすでに説明した。河合氏によれば，「あらゆる分析と総合にとっては本質は両者の折返し点として存在しており，したがって本質顕現思考は（有機体理論，自然法的思考に限らず）すべての理論モデルに多少とも内在している。」しかし，スターリン主義の思考の特質は「二つの本質を想定せずに，一方だけに本質を見たことにあった。」⁴⁷⁾ スターリン主義的思考の特徴が河合氏が指摘するように一つの本質を想定する点にあるならば，議論の自由はこの一点に収斂される。これにたいして国家学者たちが提起する相対する二つの本質は，ソ連国家における議論の自由を内側から切り開く。そして二つの本質の逆説の大きさが，議論の自由の幅を規定するのである。国家学者たちは，二つの本質論が議論の自由の拡大を目的にしているとは思ってもいないであろう。しかし，自由の拡大が意図されていなくても少なくとも結果においては本稿において明らかなように彼らの用いる語彙は科学的共産主義者よりも豊富であり，議論の幅は拡大している。ソ連の国家学者は，イギリスの政治哲学者アイザーク・バーリンのマキアベリについての形容を用いるならば，自由を意識しない「無自覚な自由主義者」たちである⁴⁸⁾。

円卓会議の1年後の1984年に発表されたチホミーロフの論文「国家学」は，この学問の基礎研究の一つとして「複数の目的の設定」を挙げている。チホミーロフは明らかにソ連社会主義国家の中に，複数の価値の存在を認めようとしている。ソ連社会主義国家は共産主義社会への過渡期という単一の価値を所有するのではなく，それ自体が複数の価値もっているのである。こうしてロシア革命後科学的共産主義者によって構築された国家についての認識方法は，国家学者たちによって大きく転換されようとしている。

国家学者たちの様々な提言は，円卓会議の2年後に始まったゴルバチョフ改革のなかに活路を見出し始めている。そしてゴルバチョフ書記長自身がブレジネフ，アンドロポフ，チェルネンコといった歴代の政治指導者とちがってソ連最高会議幹部会議長を兼任しなかったという事実，ゴルバチョフがソ連共産党第27回大会において国家機関の活動の活性化，特にソヴェト人民代議員のイニシアチヴの強化を訴えたこと，ソ連共産党中央委員会機関紙『プラウダ』が「われわれソ連の民主主義」と題する社説で共産党の役割に触れ「党は国家機関や社会組織に代わったり，その代理をつとめることはしない」⁴⁹⁾と宣言したこと——国家の自立性を促すこれら一連の現実の趨勢は，理論面において国家を科学的共産主義理論から切り離された独自の研究対象として確立しようとするいわば「恥しがり屋の急進主義者」である国家学者たちには大いに励ましとなったであろう。さらに彼らを喜ばせたのは，例えば1987年1月の共産党中央委員会総会でゴルバチョフが「社会主義的民主主義」の実現を説くにあたって「民主主義と規律」「自主性と責任」「権利と義務」という具合に国家学者たちの「思考様式」と同様に，それぞれの異質な要素間の組み合わせから論じていることである。つまり一つひとつの言葉が独立した排他的な価値をもち，これらの言葉の結合がゴルバチョフ改革を支えている。しかしゴルバチョフがこの緊張に堪えかねて，もし一方の価値を捨象するならば改革は挫折し，彼自身はすべての権力を掌中に収めるスターリン主義者に転落することになるであろう。

—注—

- 1) ソ連の科学的共産主義者たちは、自分たちの理論の創始者としてマルクス、エンゲルス、レーニンの名前を挙げている。*Теория государства и права*, М., 1983, стр. 19.
- 2) 蠟山政道『日本における近代政治学の発展』(ベリかん社, 1968年), 65-67頁。
- 3) *Теория государства и права*, М., 1983, стр. 3-26.この書物の中でヴァシーリエフはレーニン以後国家と法理論を継承した第1世代の研究者としてП. И. Стучки, Н. В. Крыленко, У. И. Курский, Е. Б. Памуканисの名を挙げ, 1930-40年代に貢献した人物としてН. Г. Александров, М. А. Аржанов, С. Н. Братусь, С. А. Голунский, А. И. Денисов, М. Ц. Карева, С. Ф. Качельян, К. А. Мокичев, Ц. Е. Недбайло, М. С. Строговичの名前を列挙している。今日の研究者としてはА. М. Айзенберг, С. Котляревский, В. В. Малькевич, З. Л. Розаров, Э. Л. Розив, В. В. Серкова, Ю. Г. Ткаченко, М. И. Хмелининらが有名である。
- 4) 藤田勇『ソビエト法理論史研究』(岩波書店, 1968年) 11-13頁。
- 5) В. И. Ленин и проблемы научного коммунизма, М., 1969, стр. 159.
- 6) Белых, А., *Политическая организация общества и социалистическое управление*, Л., 1967, стр. 198.
- 7) Киреев, А., *Политика КПСС и её роль в научном управлении социалистическим обществом. Диссертация на соискание учёной степени кандидата философских наук*, М., 1968, стр. 4.
- 8) Варламов, К. И., *Ленинская концепция социалистического управления*. М., 1973, стр. 351.
- 9) Украинец, П. П., *Партийное руководство и государственное управление*, М., 1976, стр. 62-67.
- 10) *Вопросы развития Советов на современном этапе*, М., 1966, стр. 73-74.
- 11) Курашвили, Б. К., *Очерк теории государственного управления*, М., 1987, стр. 5-25.
- 12) *Актуальные проблемы теории социалистического государства и права*, М., 1974, стр. 3-4.
- 13) Там же, стр. 19-24.
- 14) Тихомиров, Ю. А., "Государствоведение: Проблемы и перспективы," *Советское государство и право*, 1984, No.6, стр. 11-18.
- 15) *Советское государство в условиях развитого социалистического общества*, М., 1978, стр. 11-12
- 16) Тихомиров, Ю. А., там же.
- 17) *Советское государство и право*, 1983, No.7, стр. 56-61.
- 18) Андропов, Ю., "Учение Карла Маркса и некоторые вопросы социалистического строительства в СССР," *Коммунист*, 1983, No.3, стр. 20.
- 19) *Актуальные проблемы теории социалистического государства и права*, М., 1974, стр. 99-

110.

- 20) *Правда*, 7 марта 1986.
- 21) 蠟山, 前掲書, 65-66頁。
- 22) Бурлацкий, Ф. М., “Политика и наука,” *Правда*, 10 января 1965.
- 23) 1960年代に結成されたと思われるソ連政治学会の当時の正式名称は Советская ассоциация политических (государствоведческих) наукであった。ここでのгосударствоведческиеは科学的共産主義理論を意識したものであったが、1978年以降はこの言葉は消えた。
- 24) *Научный коммунизм*, М., 1983, стр. 3.
- 25) *Советское государство и право*, 1983, No.8, стр. 42-44.
- 26) *Советское государство и право*, 1983, No.7, стр. 61-62.
- 27) 下斗米伸夫「非スターリン化とソビエト政治体制 — 州第一書記と政治文化 — 」(溪内謙, 荒田洋編『スターリン後のソ連社会』, 木鐸社, 1987年所収) 参照。下斗米氏は党の指導者を「農村型」「工業型」「都市型」に分類し, 「地方における『農村型』の比重の低下と『工業型』『都市型』の増加という趨勢は, 都市化・工業化に伴って不可避に生じる過程であり, これとともに全国の政治構造そのものにも変化をもたらす可能性がある」と指摘している。
- 28) *Социологические проблемы общественного мнения и деятельности средств массовой информации*, М., 1979, стр. 19.
- 29) 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店), 第13巻, 6頁。
- 30) この問題については西側諸国ではプーランツァスとミリバンドの論争が知られている。ニコス・プーランツァス『資本主義国家の構造』(田口富久治他訳, 未来社), ラルフ・ミリバンド『現代資本主義国家論』(田口富久治訳, 未来社)を参照。
- 31) *Советское государство и право*, 1983, No.9, стр. 48-49.
- 32) *Советское государство и право*, 1983, No.8, стр. 49-50.
- 33) *Актуальные проблемы теории социалистического государства и права*, М., 1974, стр. 99-100.
- 34) Тихомиров, Ю. А., *Управление делами общества*, М., 1984, стр. 65.
- 35) *Советское государство и право*, 1983, No.7, стр. 66-67.
- 36) *Актуальные проблемы теории социалистического государства и права*, М., 1974, стр. 174.
- 37) Bertrand Russel, *The Practice and Theory of Bolshevism*, London, 1920, p. 115.
- 38) *Советское государство и право*, 1983, No.7, стр. 64-66.
- 39) *Советское государство и право*, 1983, No.9, стр. 49-51.
- 40) *Основы советского государства и права*, М., 1984, стр. 23-26.
- 41) ルソー『社会契約論』(桑原武夫他訳, 岩波書店), 24-25頁。
- 42) *Советское государство и право*, 1983, No.8, стр. 48-49.
- 43) ソヴェト機関の活動内容については, *Работа Советов: теория и практика*, М., 1986.が詳しい。
- 44) *Советское государство и право*, 1983, No.8, стр. 44-45.

ソ連の『国家学』と政治改革

- 45) ミハイル・ヴォスレンスキー『ノーマンクラツーラ』(船戸満之他訳,中央公論社), 37頁。
- 46) 丸山真男『『スターリン批判』における政治の論理』,『増補版 現代政治の思想と行動』(未来社, 1964年), 321-322頁。
- 47) 河合秀和「政治」,日本政治学会編『政治学の基礎概念, 年報政治1979年』(岩波書店, 1981年), 230-239頁。
- 48) 河合秀和, 福田歓一編『思想と思想家 [バーリン選集1]』(岩波書店, 1983年) 1-97頁を参照。
- 49) *Правда*, 20 марта 1986.

‘ГОСУДАРСТВОВЕДЕНИЕ’ И ПОЛИТИЧЕСКАЯ РЕФОРМА В СССР

Ицуро НАКАМУРА

Редакция научного журнала «Советское государство и право», 1983, No. 7-9 организовала заседание «Круглого Стола» с целью проведения творческой дискуссии по проблемам развития теории социалистического государства, обсуждения спорных проблем, поиска новых подходов к их решению. В своей статье, посвященной анализу разработки проблем теории социалистического государства, я хотел бы остановиться на новом мышлении государственоведения.

Сейчас идёт перестройка под руководством М. С. Горбачёва, который взял власть в 1985 году. Горбачёв стремится к коренной реформе Советского государства. Но главное то, что учёные обсуждали проблемы социалистического государства при новой политике Горбачёва.

Теория научного коммунизма до сих пор положена в основу разработки социалистического государства. Научный коммунизм по определению его учебника— неотъемлемая, составная часть марксизма-ленинизма. Он изучает закономерность развития мирового революционного процесса, закономерности возникновения и развития коммунистической формации—высшей ступени прогресса человечества. Эти закономерности определяют основное содержание социальных изменений в нашу эпоху—эпоху перехода от капитализма к социализму и коммунизму.

Но Д.А.Керимов утверждает, что именно точка зрения научного коммунизма не даёт ключ к пониманию социалистического государства. «Разработкой проблем государства занимается и исторический материализм, и политическая экономия, и те-

ория научного коммунизма, и история. —пишет Керимов —Это безусловно так, но речь в данном случае идёт не о разработке отдельных проблем, а о развитии общей теории государства в целом. Обращение же по данному поводу к работам советских специалистов по историческому материализму вызывает известное разочарование. Будучи наукой о всеобщих законах развития общества, исторический материализм ограничивается воспроизведением сущности, основных задач и принципов деятельности государства, перспектив его развития и отмирания. Но эти основополагающие проблемы учения о государстве разработаны классиками марксизма-ленинизма.»

Керимов отмечает, что самым главным в теории научного коммунизма считается классовая сущность государства. Эта общая теория государства в целом с односторонней точки зрения по мнению Керимова является скорее комментаторской, описательной, чем подлинно творческой новаторской работой. Научный коммунизм никуда не годится для анализа присущих социалистическому государству неантагонистических, неклассовых и отдельных противоречий. В центре внимания Керимова есть вопросы негосударственных противоречий. В этом суть дела.

Сегодня Советский Союз находится на этапе развитого социализма. Но этап развитого социализма является не только переходом к коммунизму. Этот этап имеет неантагонистические, неклассовые и отдельные противоречия. Это и начало большого и сложного поворота к решению задач совершенствования социализма в СССР.

На рассмотрение участников заседания были предложены следующие вопросы: 1) противоречие между государством как политическим объединением всего советского народа и государством как политико-управленческой организацией; 2) противоречие между участием людей в управлении делами государством и устранением от него; 3) противоречие между интересами управляемых и интересами управляющих.

Во-первых, согласно Конституции СССР, советское общенародное государство охватывает и представляет все классы и социальные слои общества, все нации и народности, являясь политическим объединением всего советского народа как новой исторической общности людей. —пишет В. Д. Ардашкин —Классовость советского общества (в плане учёта классовых различий) не имеет уже первостепенного значения в организации и функционировании государственности. Напротив, преобладает общесоветское, общесоциальное. Сложилось социально-политическое и идейное единство советского общества, ведущей силой которого выступает рабочий класс. Последовательное направление социальной политики государства—усиление социальной однородности общества. С другой стороны Ю. А. Тихомиров пишет, что именно государство концентрирует основные ресурсы общества и распоряжается ими в его интересах. И государство превращается во «всемирную политико-управленческую» организацию, действующую для обеспечения коренных потребностей общества. Две основные тенденции по мнению Тихомирова позволяют дать прин-

ципиальную характеристику данного процесса—последовательное развитие демократических основ советского государства и повышение его роли в управлении общественными процессами. В то время как Ардашкин считает государство объединением на основе социальной однородности, Тихомиров полагает, что социалистическое государство составляют различные интересы людей.

Во-вторых, современное советское государство справедливо характеризуется как всенародная организация. —пишет Б. М. Лазарев —Но при раскрытии этого положения подчёркивается обычно лишь то, что государство выражает волю и интересы всего народа. Само же государство часто отождествляется с системой его органов. При такой трактовке вопроса вольно или невольно из понятия государства как бы исчезает народ, который является в нашей стране носителем всей государственной власти, осуществляет её через Советы народных депутатов. Лазарев думает, что есть основания считать гражданина членом советского государства как организации. Он добавляет, что та историческая общность состоит из граждан, которую они называют советским народом, а каждый гражданин СССР обладает, как известно, правом участвовать в управлении делами государства. В. М. Корельский разделяет мнение Лазарева, что дальнейшее развёртывание углубления демократии обеспечивает постоянную связь государства и его органов с народом. Лазарев предлагает «разделение труда между органами государства» для создания более широкого участия граждан в управлении делами государства. Разделение труда между органами государства производится прежде всего по видам этих органов, а затем—по отдельным звеньям внутри каждого вида. Такое разделение осуществляется, естественно, в рамках единого советского государства и имеет политическое значение. Оно прямо связано со многими аспектами развития демократии и укрепления законности. Следовательно, в определенной степени и в нашем государственном механизме применяются «автономность одних видов органов от других, система сдержек и противовесов, но, конечно, при верховенстве Советов над другими государственными органами, в рамках единой их системы». Более детального изучения Требуется проблема размежевания компетенции между органами различных видов и их взаимодействия. В государственных органах, как известно, часто наблюдается бюрократизм. Это мешает народу участвовать в управлении делами государства.

В-третьих, для понимания многих насущных проблем социализма, по мнению А. П. Бутенка, важное значение имеет исследование следующего вопроса: отношения политической власти при социализме к интересам и самостоятельности трудящихся; соотношения интересов управляемых и интересов управляющих. Власть от имени трудящихся и для трудящихся, в их интересах уже давно утверждена и успешно функционирует в странах реального социализма. —пишет Бутенко—Это, однако, не означает, что в области политической власти при социализме нет никаких сложных

проблем, в частности, и в ходе превращения власти для трудящихся во власть через самих трудящихся. Он сказал, что эта проблема заключается в бюрократическом и технократическом мышлении. И Бутенко сам пишет, что решение этой проблемы заключается не только в том, чтобы, передав власть трудящимся их представителям—управляющим, создать надежный механизм, гарантирующий реализацию воли трудящихся, а также в том, чтобы с самого начала научно обоснованно разделить властные функции на две части: наиболее принципиальные, решающие функции сделать прерогативой самих трудящихся, а повседневную управленческую—прерогативой представителей трудящихся, управляющих.

Высказанные на заседании мнения можно суммировать следующим образом. Советское государство состоит из неантагонистических, неклассовых противоречий. Теория научного коммунизма не позволяет учёным анализировать их. В центре внимания учёных есть не переход социализма к коммунизму, а сам социализм.